

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	前田, 富士男(Maeda, Fujio)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2008
Jtitle	Booklet Vol.16, (2008. )
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000016-0005">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000016-0005</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## はじめに

ひとり絵筆をとって画面に対峙する、聴く者もない部屋でひとときピアノの鍵盤に指をおく——芸術家のそうした姿は、想像するにたやすい。しかし、芸術の歴史を繙くまでもなく、自立かつ孤独な時間を歩むこうした芸術家の姿は、むしろ例外と言うべきだろう。

芸術家は、つねに共同して作品制作に従事し、しかも、たんなる共同作業に帰着しえない感性的価値を求める人間存在にほかならない——思い切ってそう定義しなおしても、あながち間違いにはならない。ワークショップ (workshop) とは、そうした仕事を意味する。

まず、ワークショップの概念を造形芸術、つまり美術に即して考えてみよう。それは、とりあえず、家族的な手仕事や作品販売の場、また親方・弟子・見習いといった職分の信頼・訓練関係や契約関係、あるいは仲間的な同業関係がづくりだす協働空間としての工房と言い換えてよい。

古典古代でコレギア (collegia) と呼ばれた同業者団体や、西洋中世で大聖堂の建設に携わったパウヒュッテ (Bauhütte)、同業組合 (英語 guild、独語 Gilde/Zunft、仏語 corporation)、バンディネリがローマに創始したとされる美術アカデミア (1531) を想起しよう。あるいは、ヤーコブ・ブルクハルトの「チチェローネ」をあげるまでもなく、ローマをはじめ各地に形成された芸術家コロニーも看過できない。工房とは、そうした多様な仕事を総称する名称にほかならず、英国のワークショップ/スタジオ、ドイツのヴェルクシュタット (Werkstatt)、フランスのアトリエ (atelier)、イタリアのボッテガ (bottega) も包括し、制作そのものとともに、制作技術の教授・承継・訓練、また制作品の提供・流通を営む場である。

ヨーロッパ近代、19世紀。近代はワークショップの転換期である。なぜなら、上記した伝統的な工房に加えて、ドイツ/オーストリア系のナザレ派、また英国のラファエル前派のような兄弟団 (brotherhood) 的な盟友グループが登場し、さらに、従来の親方制度的な職業工房とも、美術アカデミー的な教育工房とも、また同業組合とも異なる新しい「芸術家協会 (society, Gesellschaft, société)」が登場するからだ。印象派も、そうした協会のひとつにほかならない。これらの

延長上に、アール・ヌーヴォーの諸グループ、英国のオメガ、ドイツのヴォルプスヴェーデ、フランス・キュビズムのモンマルトルやサロン・キュビストの諸グループ、チューリヒのダダ、バウハウス、アメリカのブラックマウンテン・カレッジ、ウォーホルのファクトリー、ひいては村上隆まで、たとえば、誰もがこうしたリストアップの不備に眉をひそめ、欠落を指摘するために数々のワークショップの名称を指折るにちがいない。ワークショップ／工房の多様な展開は、それほどまでに19／20世紀のアートシーンの特性と指摘せざるをえない。

つぎに、そうした特性をしかし、いったんカッコにいれ、また「アート・ワールド」(ダントー)にとどまることなく、他の社会領域にも眼を転じ、ワークショップの現代における素地と機能、その新しい可能性を問いかけてみたい。

現代におけるワークショップの要請とは、慣例や慣習、約定として認知されている協働性を能動的に一時停止し、それを別様な協働性に組み替えることにあるはずだ。同時に、そこから成果が生まれたとすれば、その成果を再度、慣例・約定的な協働性と照合し、より能率的な協働性の方式へと改革する、そうした要請にちがいない。こう確認すればしかし、これはたんなる生産主義や能率向上でしかない、すなわち協働を通じた「学び」と「教え」の拡充、あるいは協働による成果物や成果経験の充実でしかない、当然の反論がなされよう。

けれども、現代におけるワークショップの要請は、必ずしも生産主義にかかわってはいない。その要請が多様な感性的価値の認識と実践にかかわっていればこそ、緊要な論点の対象になるのではないか。そもそも日常性とは、生活価値を規範とする制度である。現代におけるワークショップへの関心はしかし、日常性の停止、すなわち、価値の次元を日常生活次元から逸脱させ、別様な文化的価値とするのではないか。しかも、その価値への志向がアート・ワールドや教育ワールド、実業界など、専門に分化した「ワールド」に帰着する事態を拒否しているからこそ、示唆深いのだ。

ワークショップの本質を問う本特集は、芸術制作や教育実践にとどまらず、現代の文化・社会環境における反規範的規範とも言うべき関心をワークショップ概念に即して模索する試みである。実業、教育、心理療法、芸術、宗教など、多様な諸領域でエネルギーに活動される方々にご論考を寄稿していただい

た。大月ヒロコ氏はミュージアム開設・企画運営の先導的な活動で知られる。佐藤允彦氏はわが国を代表するジャズ・ピアニストで、また編曲家。演出家安田雅弘氏はアマチュア劇団や自治体、企業にて独創的な演劇ワークショップを主宰する。建築家・建築論研究者の石川恒夫氏は「バウビオロギー（建築生物学）」の指導者のひとり。遠山正道氏は三菱商事に入社後、Soup Stock Tokyoほかを社内ベンチャー企業として設立し、また造形デザイナーの活動も展開する。西河正行氏は心理療法の専門家で、エンカウンターグループや心理劇を実践。岡崎香奈氏はロンドンの英国王立音楽院ピアノ科卒業後、ノードフロピンズ音楽療法センターにて音楽療法を学び、わが国のこの領域における代表者。シェーマス・カレン氏はカトリック・アイルランド系宣教会の聖コロンバン会司祭で、現在は熊野を中心に「諸宗教の対話」を実践する。真壁宏幹アート・センター所員は教育学研究者。本誌寄稿者の方々に謝意を表しつつ、同時に、読者の方々からの反論や批判も期待したい。

慶應義塾大学アート・センター所長 前田富士男

Artist in Campus 大竹伸朗ワークショップ ‘スクラップ’  
2007年12月14日 慶應義塾大学三田キャンパス東館展示スペース  
主催：慶應義塾大学アート・センター